集つた三千五百の母親
平和に幸せに
第二回の日本母親大会終る

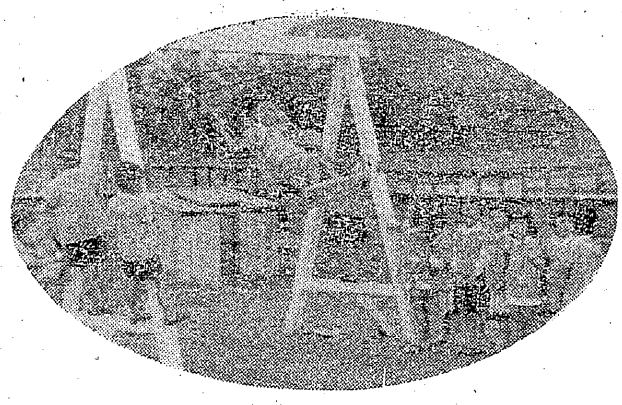
日本中のお母さんの集い「第二回日本母親大会」は八月二十七日から三日間東京で開かれました。昨年六月はじめて全国から三千人のお母さんたちが集つて悩みをぶちまけ合いました。そして〃子供の幸福を守るために手をつなぎましよう〃と叫びあつたのです。今年もあらゆる局から集つたお母さんたちは約三千五百人、この中でお母さんたちの切実な願いが話し合われ明るい家庭、社会の建設が誓い合われました。

恥も見栄もすて、

北は北海道から南は鹿児島まで一県残らず参加したお母さんたちの中には、超満員の会場の入口で背のびして覗くものもあるほどでした。大会には長崎の原水爆禁止世界大会に出席した四人の外国代表許広平（中）モニカ・フエルトン（英）フリクロード・クーチユエリー（仏）ゴロポーパー（ソ連）らが帰国を延期して列席し、お母さんたちを感激させた。日本のお母さんたちの願いを世界中に伝えることができるからであります。お母さんたちは恥かしさも見栄も忘れて、これまで苦しんできた各自の問題を叫び合つた。それは全く日常生活の中から出た切実な問題ばかりでした。原子力の平和利用、基地の子供のこと、家族制度復活の心配、入学難と就職難、計画出産、健康と社会保障費等々が話合われました。

農漁村の母も参加

とくにこんどの大会の特徴として農漁村のお母さんの新たな参加が挙げられます。農村のお母さんは「農村では子供の夏休みは家計を助けてもらうための休みである」と訴え、漁村のお母さんは「夫や息子が漁に出ても捕獲されるのではないかと不安な毎日を送つている」と訴えています。モンペにブラウス姿で熱弁する農村のお母さんが「私はこんな大勢の人の前で話したことがないもんですから」というとおり同じことを何回もくり返したり、途中でつかえてしまつたり、みんなの声援に支えられての意見発表でした。ある母親は「夫と子供のことで一杯で自分の健康を忘れている。体の調子が変なので調べてみると大分結核が進んでいた。参加したお母さん一人一人が各地へ帰つたら母親の集団



検診運動を起そう」と呼びかけた
表現に自信

生活保護法を受けているあるお母さんは高校生の長男が盲腸炎になつたので入院させようとしたら高校へやれるくらいなら医療保護費は打切りだと云われた。一万円の

引ずられて

大会では母親大会の印象的な場面も出てきました。いうつもりでなかつたお母さんが、みんなの熱弁に引きずられて〃あと二分でいいから私にも言わせて下さいあと二分…〃というこえがあちらこちらからおきて司会者を困らせました。張切つて立上つたまではよかつたが話す前に泣き崩れてしまう人もみかけました。

借金をかかえたこのお母さんは学生の健康保険制度を提唱した。母親大会が動機となつてただ苦しみをたえしのぶだけであつた日本の女性が、いまでは自分たちの意見をもち、表現力をもつたということは大きな成果です。さらに異つた環境におけるお母さんたちでもお互いの心配ごとを話合いによつて解決の方向を見出すことを知つたこと、ただ〃政治がわるい〃で片づけていた段階から、わるい政治をさせる自分たちの責任に気づいたことも大きな進歩です。

泣訴でなく解決を

今回が第一回にくらべて進歩したのは第一回のときは自分の苦しみを泣き叫び爆発させるのに終始したのに対し、今度は原因を考え出し、具体的な解決策を出そうという傾向にあることです。そして参加者の階層が広まり職場の婦人、農村婦人、家庭婦人との間の結びつきができた、それに全国組織を持つ団体が協力するようになり、具体的にはすでに保育所の増設運動、母親自身の勉強会、健康診断子供によい映画をすすめる運動などが行われようとしていることです。

世界の母親の氣持は皆一つ

大会に出席したフランスのクーチユエリーさんは

日本のお母さんと話合つてわかつたことは、国がちがつても母親はみんな同じ気持ちをもつているということです。

私たちの態度一つで平和に暮せることを強く感じました。日本のお母さんの望みは実現されるでしょう。

と語つていた。

なおつぎの大会宣言を採択して三日間の大会を終了した。

全国から集つたお母さん、私たちは子供のしあわせのため、そして平和な住みよい社会をつくるため三日間みんなで考え、話合つてきました。この沢山の母親たちの願いにもかかわらず原水爆の実験、教育委員の任命制、軍国主義の復活など心配なことばかりです。私たちは仲間をつくつて力を合せて差迫つた危険から子供を守りましよう。生命を生みだす母親は生命を育て生命を守る権利をもつているのです。

知っていますか

漂白の仕方

夏物は汗がしみていますから、洗いを十分にし、とくにハダ着類は煮洗いしますと汗もぬけます。また白いものは手まめに洗濯していても、長いうちには黄色くなりがちですが、漂白剤を使いますと美しく仕上がります。

◉木綿・レーション・スフ類＝水洗い後、水五合と晒粉茶さじ八杯を混ぜて作つた漂白剤に一時間くらいつけて漂白します。そのときの注意として(1)漂白する品物が液からはみ出さないように、(2)まだらにならないようにときどき品物を上下すること、(3)漂白液の容器は金属製をさけ、木製かガラス、瀬戸物製を使用、(4)操作には日光を避けましよう。

◉絹・毛織物類＝過酸化水素かハイドロサルフアイトを使用し、晒粉は禁物です。

過酸化水素を使用するとき＝過酸化水素を三十五倍に薄め、これにアンモニア十滴ほど（多すぎぬよう注意）を落した溶液中に品物をつけ、温度を六十度くらいにあげて約一時間で漂白します。

ハイドロサルフアイトを使用のとき＝ハイドロサルフアイト茶さじ二杯を六十度くらいの湯一升にとかし、液中に品物を入れて温度を八十度くらいに上昇しながら、約三十分間で漂白します。サク酸滴を加えると一そう白く仕上がるでしよう。

おそかり氏　中村かめお

詩

【入選三席】

ある女

三川森啓助

卓子の上には
鉄の料理の
メニューがあつた。
宝石をちりばめた白い指が
ヒステリツクにうごき
時には外国からも
好みの料理を取りよせた。
意情な彼女は
日ましに
ぶよぶよと膨れあがり
すわつたまゝで
ひねもす蕪をたべた。
蕪の倉庫が
あたりに建ちならび
その汚臭に耐えられなくなると
彼女はときおり
吐気をもよおした。
げつぷ　げつぷ
食べ過ぎた鉄は
ひとつも吐き出されないで
彼女の足もとには
自身の醜い腸物だけが
まひるの太陽の中で
どろりと流れ出た。
彼女は
いまいましげに舌打ちすると
加速度的に増してくる
処理しきれなくなつた蕪のなかに
それらの腸物を、
ほふり込み、火をつけた。
噴きあげられた火柱は
あたかも天を冒涜するかのように
ぱあんと雲を突きぬけた。
そしてそれらの火は
彼女の頭髪はもちろん
陰毛にまで燃え移つてきたが
彼女の鉄への食欲は
未だ依然として続いている。

懸賞付き　頭の體操

【第一問】A、B、Cの三君はそれぞれ弟を一人づつつれてキャンプに出かけました。夕食は円陣にすわつてたべました。(1)A君もB君もとなりは自分の弟ではありません。(2)A、B、C君とも自分の弟の前方にはすわつていません。(3)A君の弟はB君の右どなりにすわつています。(4)A君の両側は二人とも弟です。六人がすわつている順序をあてて下さい。

【第二問】声「もしもし、山本ですが…」女中「はア？　どなたですか」声「ヤマモト、ヤマトのヤマツチのマ、モミジのモ……」女中「えエ、モは何のモですか？」声「モミジのモ、トウキヨウのトです」おや、この問答、少し変ではありませんか。

【第三問】A、B、C、D、E、Fの六人が将棋のリーグ戦（総あたり試合）をやりました。成績はAが四勝一敗、Bが全勝、Cが一勝三敗一引分、Dが三勝二敗でした。Eは一度だけ勝ちました。Eは誰に勝つたのでしよう。

前回の解答

問一…正確な時間十二時五十九分（または一時一分前）でA四分遅みB二分遅れC五分遅れD三分遅んでいる。

問二…兄が早くゴールインする。正確者が多数でしたので抽せんにより左の五名を決定しました。支部教宣部で賞品を受取り下さい長谷川正春（三作）新藤節雄（宮浦）南野義馬（宮浦）木下利次（四山）猿渡主計（本所）

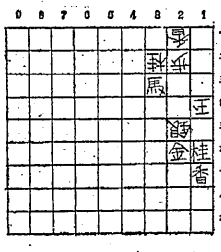
今週の映画

○セントラル＝五日より「風と共に去りぬ」
○太陽館＝五日より「力道山・男の魂」「へそくり社員敢斗す」
○大天地＝五日より「怪猫五十三次」「魔の花嫁衣裳」
○東映＝五日より「宝島遠征」「日輪太郎大会」
○銀星＝五日より「不良少年」「女大学野球狂時代」
○名画座＝五日より「顔役時代」「脱獄の逃亡」
○三鉱＝「初恋チヤツチヤ娘」五日三作、建設、六日三川、鶯務七日四山、八日緑ガ丘、九日宮浦、十日宮原、万田、十一日渡瀬製作

詩将棋

【ヒント】香の道を生すためには桂を有効に使うこと。

持駒　歩

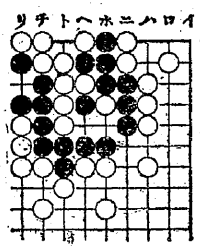


詰囲碁

（出題　小野　強）

白先三

【ヒント】白先で三劫となればこの一局は勝敗なしとなる。



女囚と共に

刑務所の朝は早い。午前六時半サイレンと共に起床、各房点検、朝礼、食事そして直ちに作業が始まる。

作業場の機械の傍で、突然、滝よし子が卒倒した。芸妓上り24才の弱々しいこの女囚には、たゞでさえ苦しい刑務所の労働だが、出所を待つてくれている貧しい恋人のため出所金を少しでも多くと病をおして就業しているのだ病の枕許で読まれる儚しい恋人並木の手紙におせび泣く滝のいじらしさが杉山の心を強く揺り動かす

外界と劃せられた刑務所の中では、手紙だけが社会の波を伝えるたゞ一つの窓だ。幾多の喜びと悲しみとをもたらす手紙に食い入る様に何べんも読み返し、懐しさにそつと頬を拭う。金岡は子供の純真な手紙に

「…何がやさしいお母さんや、悪い悪いお母ちやんや…」

と号泣してしまう。

「やめて！」

突然ヒステリツクな声がとんで南がやり切れない気持を爆発させる挙句の果は

「ふん課長さん、私はアンタの天使面が気に入らないんだよ。自分だけ良い子になつて、哀れな私たちをみるのが嬉しくつて仕方がないんだろ？……」

と杉山に喰つてかゝる始末だつた。しかしこの騒ぎの中に平井の愛児が息を引きとる。

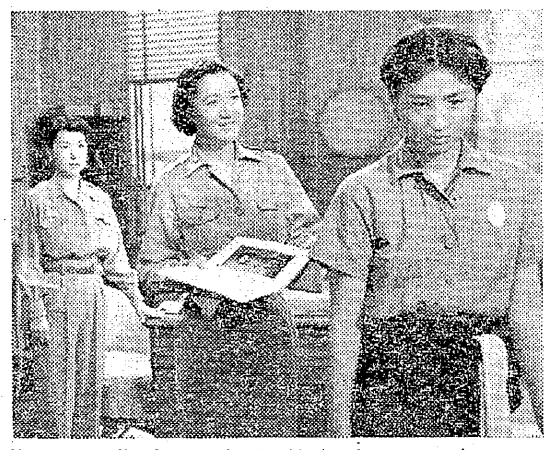
刑務所前の道を遥去かり行く愛児の柩を、鉄格子越しにじつと見送りながら、石の様に立ちすくむ平井の姿——。

夜、大野分類課長の唱える通夜の読経が霊安室から静かに監房内に流れる。じつと耳を傾ける女囚たち——。

南は堪え切れぬ寂しさの中にあり日を追懐する。……アパートの部屋の中に立ちはだかつた多田（恋人）の怒りにもえた顔。だまそうとしたんじやない。私はたゞ幸福をとり逃すのが怖いばつかりに前科を隠していたんだ子供の……子供の泣き声……あゝ気が狂いそうだ……燃えている。あの人の家が燃えている。あの火の中にとび込んで坊やの骨髄もろとも灰になる心算だつたのに……。

南の手が天井の電燈にかゝる。電気をシヨートさせて布団の綿に火花をつけた。こげ臭いにおいに房内は騒然となる。この火事騒ぎの中に、哀れな平井は人眼を逃れて自らの生涯を閉じた死によつて漸く安らぎを得た薄幸の女囚のため杉山は熱い涙を流す

竹原所長が東京の会議から帰任する。免囚保護の一助にと設置した美容学校の許可は却下されたが所長は撓まぬ熱意に燃えている、南の教化の難しさに自信を失い勝ちな杉山は強く叱だされた源いであつた。



折柄、朝報が二つもたらされた一つは厚生委員沢夫人から、花嫁を所内から世話してほしいという報せ。所長、杉山たちの相談で原妙子23才に白羽の矢が立てられる破廉恥な養父を過失死させた罪の意識に苛まれる苦しさを狂暴な雷土てるよの面倒をみたり人のいやがる作業を引き受けることでまぎらわそうとしているこの妙子に、さしのべられた救いの手である。